

# オーストラリア・クイーンズランド州 におけるリテラシーの評価

足 立 幸 子

## 1. はじめに

本稿の目的は、オーストラリアのクイーンズランド州のリテラシー評価の実態を描き出すことで、国際的な読むこと・書くことの評価や指導の動向を示し、我が国の読むこと・書くことの評価及び指導のあり方を考察することである。

オーストラリアは、先に行われた国際調査 (PISA: Programme for International Student Assessment) で、2000年の調査でも2003年の調査でも、読解力平均得点が4位と高い成績を上げている (Lokan, Greenwood & Cresswell, 2000)。英語圏の国々の中で、古い伝統から比較的自由で、先進的な取り組みを行っている国として知られている。基本的には州ごとに教育を行っているが、中でもクイーンズランド州は、クイーンズランド大学の研究を積極的に州の教育政策に取り入れていることで、英語圏の研究者からも広く注目を集めている (Tierney, R. J. & Readence, 2005)。本稿は、我が国でクイーンズランド州の取り組みを取り上げるおそらく初めての原稿であるので、その取り組み自体を記述することに重きをおくことになるが、なぜこの取り組みが我が国に影響を与えるのか、どのような点で影響を与えるのかについても、検討を加えたい。

## 2. 英語圏におけるリテラシー教育研究の動向

本稿のタイトルには、「読むこと」「書くこと」ではなく、「リテラシー」という言葉を用いた。英語圏の国々では、最近では、リテラシー教育という言葉が頻繁に用いられるようになった。これは、我々が行っている行為が、従来の意味で用いている文字情報を「読むこと」「書くこと」の範囲に入りきらなくなっていることを意味している。

1996年にニューロンドン・グループが提案したマルチリテラシーズという概念は、このことを象徴的に表し、英語圏のリテラシー教育に大きな影響を与えた (New London Group, 1996. Cope & Kalantzis, 2000. 足立, 2005.)。マルチリテラシーズとはリテラシー、すなわち、読んだり書いたりすることが、マルチな状態であることを指す。マルチであるというのは、様々なメディアが発

達した結果、例えばホームページを読んだり作ったりすることのように、様々な色や形などの視覚デザインや音声までもを含めて読んだり、表現したりということ、さらに単言語ではなく、様々な言語を使いこなしていくという現状を表している。ニューロンドン・グループは、この現状から社会の未来像を想定し、その社会の中で学ばれるべきマルチリテラシーズの教育のあり方をモデル化した。それは、生徒が、自己の経験から立ち上がる内容（このことをニューロンドン・グループは「状況に埋め込まれた実践」という概念として提示した）について、メタ言語によって意味を明示しながら（同「明白な指導」）、その内容が存在する枠組みを検証し（同「批判的構成」）、他の文脈に転移させる（同「転移した実践」）というものである。それは、けして規範的な社会から、読み書きを模倣的に教わるというものではなく、自分で意図的に意味を求め作り出していく実践であるのである。

マルチリテラシーズ概念は、出るべくして出された概念であった。2000年前後にかけて、マルチリテラシーズは英語圏の読むこと・書くことの教育に携わる研究者・教育者に広く認知されるようになった。最近の学会では、このようなマルチリテラシーズ実践の実態をとらえようとする質的研究(Qualitative Research)が、大半を占めるようになってきた。読むことの対象に対する研究も、市販されている絵本、児童文学、児童読み物(科学読み物などノンフィクションを含む)はもちろんのこと、グラフィック・ノベルズ(日本語で言うとマンガ、コミック本等)、デジタル・ブック、インターネットなど幅を広げてきている。

### 3. ニュー・ベーシックス・プロジェクト

さて、このマルチリテラシーズを正面から教育政策レベルで取り上げたのが、クイーンズランド州の、ニュー・ベーシックス・プロジェクトである。ニュー・ベーシックス・プロジェクトには4つの柱がある。それは、

- (1) 生涯の道筋と社会の未来像(私は誰でどこに向かうのか)
- (2) マルチリテラシーズとコミュニケーション・メディア(私はどのように意味を作り出し、世界とコミュニケーションするのか)
- (3) 活動的市民権(コミュニティ、文化、経済における私の権利と責任は何か)
- (4) 環境とテクノロジー(どのように私は自分の周りにある世界を記述し、分析し、形作るのか)

である。(2)に「マルチリテラシーズ」という言葉が含まれているだけでなく、(1)～(4)の内容全てが、ニューロンドン・グループが提案した社会の未来像を踏まえているものとなっている。

ニュー・ベーシックスとは「新しい基礎」の意味である。すなわち、ニュー・ベーシックス・プロジェクトとは、従来の教科枠や既存の教育内容を見直し、

新しい教育の基礎的事項を提案するためのプロジェクトであった。オーストラリアでは、基本的に州ごとに教育を行っているのであるが、1994年に国全体のカリキュラム（基準あるいはフレームワーク）が発表された。そして、各州がそれぞれに州独自のカリキュラムを作成するという事になった。ニュー・ベーシックス・プロジェクトは2005年の新しいカリキュラム作成のため（このことをフレームワークと呼んでいる）に、州が実験的に行ったプロジェクトであり、参加学校とともに新しい基礎を作り出していこうとする試みであった。

このプロジェクトを支えたのは、クイーンズランド大学のAllan Luke、Carmen Luke、Peter Freebodyといった研究者であり、彼らはマルチリテラシーを提案したニューロンドン・グループのメンバーでもあった。したがって、ニュー・ベーシックス・プロジェクトはニューロンドン・グループの考え方を踏まえているので、学習内容は生徒の自己の経験から立ち上ってくるものと考えている。あらかじめの教科(Key Learning Area)を想定しない。そこで、クイーンズランド州政府は、リッチ・タスクス(Rich Tasks、豊かな課題という意味)という大きな活動を提案し、その中に、マルチリテラシーを使いこなす活動が含まれているようなしくみを提案した。例えば、1年生～3年生のリッチ・タスクスの中に「ウェブページのデザイン」というものがある。その中身は、

○イントラネットに、2ページ以上で電子メールリンクをはったウェブページをアップロードする。

○個人・家族・学校・地域の人々に関する有益な情報を読み手に示す。綴り・表記法・文法の誤りをできるだけ押さえ、効果的に伝わるようにする。提供される情報の性質は、実質的なもので注目に値するようなものである。

○電子媒体を適切に使いこなし、読み手が楽しんで読めるようにし、効果的な字体の使用など美しいものにする。使用可能なモデルを、計画的に慎重に組織立てて再デザインしたものが現れるようにする。

○テクノロジーの使用に関しては、ソフトウェアの利己的利用の特徴、ファイルの管理、リンクの一貫性・効果的な利用・はり方などに注意する。簡単にアクセスしたり利用したりできるもの（たとえば最小限のスクロール）にする。と様々な条件がついているのである。

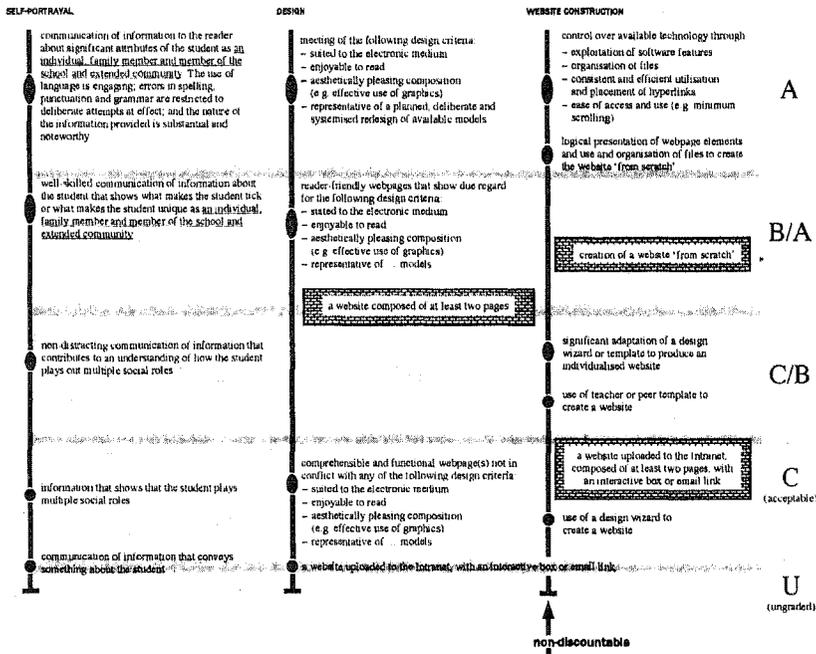
#### 4. グレーディング・マスター

ニュー・ベーシックス・プロジェクトの評価はどのように行われているだろうか。クイーンズランド州は、グレーディング・マスターという評価法を編み出した。これは、一種の図である。そのリッチ・タスクスにおけるいくつかの重要な観点について、子どもの姿の状態を示したものである。例えば、先ほど例にあげた「ウェブページのデザイン」の活動であれば、「自分の記述」「デザ

This grading master is to be read in conjunction with the Rich Task itself and the relevant information in the *Grading and Moderation Handbook*.

**Published desirable features**

- a website uploaded to the Intranet, composed of at least two pages, with an interactive box or email link.
- communication of information to the reader about significant attributes of the student as an individual, family member and member of the school and extended community. The use of language is engaging; errors in spelling, punctuation and grammar are restricted to deliberate attempts at effect; and the nature of the information provided is substantial and noteworthy.
- meeting of the following design criteria:
  - suited to the electronic medium
  - enjoyable to read
  - aesthetically pleasing composition (e.g. effective use of graphics)
  - representative of a planned, deliberate and systemised redesign of available models.
- control over available technology through:
  - exploitation of software features
  - organisation of files
  - consistent and efficient utilisation and placement of hyperlinks
  - ease of access and use (e.g. minimum scrolling).



**Expanders and clarifiers**

1. SELF-PORTRAYAL: Information that is known to misrepresent the student is to be ignored.
2. DESIGN: Since students may not have management access to the Intranet, it does not matter who uploads the websites to the Intranet.
3. DESIGN: 'Reader-friendly' is used to describe webpage(s) where the writer has done the work so that the reader can absorb the information.

図1 グレーディング・マスターの例 (ウェブページのデザイン)

イン」「ウェブサイトの構築」の3つの柱がある（図1参照）。それぞれどのような姿になるのかが、事細かに記されている。全体は大まかにA、B/A、C/B、C、Uの5段階によって分けられている。Cまでが合格で、Uが不合格（落第）ということになる。ユニークなのは、この図は完全なマトリックス（表）にはなっていないということである。図1に示したように、基準はその内容にあわせて、微妙に上下している。また、内容も従来の読むこと・書くことにとどまらない、マルチリテラシーらしいものとなっている。例えば、デザインでよいと判断される現われとしては、そのデザインが

- ・ 電子メディアにあっている
- ・ 読むのが楽しいように作られている
- ・ 美しく心地よい作文となっている（例えば、絵を効果的に用いて）
- ・ 使用できるモデルを使ってよく計画されて、慎重で、組織だてられているものである

各姿は、必ずしも1つの段階に1つの姿ではない。その内容によって、機械的ではなく、配置されている。このようにして、細やかに生徒の姿を評価するためのツールが、グレーディング・マスターなのである。

## 5. ポートフォリオ

グレーディング・マスターだけが、ニュー・ベーシックス・プロジェクトの評価ツールではない。ニュー・ベーシックス・プロジェクトは、始まった当初は州のほうで、活動のモデルとしてのリッチ・タスクスをはっきりあらわしたが、徐々に学校のニーズに合わせて、その学校独自のスクール・タスクスを増やしていくように導いている。

筆者が視察した範囲では、ポートフォリオ（Portfolio）も、ニュー・ベーシックス・プロジェクト参加校のリテラシーの評価で使用されていた。ポートフォリオ評価は、我が国でも広く紹介されることとなったが、もとは紙を挟んだファイルで、そこに自分の行ったことや作品を溜め込んでいくというものである。筆者が視察したのは、アルバムやスクラップ・ブックの作成の場面であった。これは、リッチ・タスクスの「スクラップ・ブックをつくる」にあたる。スクラップ・ブックの歴史から、スクラップ・ブックの用途、スクラップ・ブックの作り方の説明のプリントが丁寧に挟み込まれた後、スクラップ・ブックのページが続いていた。これを見て、教師はその子が、何をどのように学んでいるかを評価していくのである。

## 6. ルーブリック

もう一つ、印象的だったのは、ルーブリック（Rubric）である。ルーブリッ

クとは、生徒の活動の様子を一覧表にしたものである。先のグレーディング・マスターよりも、単純な一覧表になっており、生徒の活動の表れが書かれている。印象的だと述べたのは、それを教師が子どもを観察するためではなく、子どもが自分自身の活動を評価するために用いるのである。我が国でも自己評価を最近は行うようになってきたが、どちらかというところ「がんばったことを書きましょう」と活動を肯定していくようなことが多い。クイーンズランド州で視察したのは、かなりはっきりとした段階で、主観ではなく具体的な活動でのルーブリックであった。ルーブリックを作成したのは教師であるようだが、自分で自分の活動をコントロールし、客観的な位置を知ること、小学校4年生の授業で行っていた。これは、ニューロンドン・グループが言うところの「明白な指導」や、メタ言語を用いながら、他の文脈に転移させていく「転移した実践」を実施しているものであると受け止めることができる。

## 7. クイーンズランド州の3年生、5年生、7年生テスト

ところで、オーストラリアの州はすべて、ある一定の学年での試験を受ける。それによって、落第が決まる。サンプリングではなく、全員が受ける試験である。クイーンズランド州の場合は、3年生と5年生と7年生の時に、リテラシーと数学（numeracy）のテストを受けることになっている。

我が国と違うことは、リテラシーのテストの内容が、かなり現実的な社会に対応したものになっているということである。例えば、リテラシーは、雑誌（magazine）に掲載された様々なタイプのテキスト6つを読むことになっている。マンガや、写真入りのノンフィクションの記事や、ホームページなど、マルチリテラシーの現象を雑誌という形式にすることによって、実現させている。これらは、一つの線條のテキストを理解するというにとどまらない。断片の情報をつなぎあわせて意味を読み取ったり、表現したりすることを求められている。また、リテラシーのテストの中には、書く作業もある。「年齢制限に関わらず小さい子用の遊具で遊ぶ」「友達の背中をたたく」「ごみをくずかごに入れない」「友達が待っているにも関わらず水のみ場を独り占めする」というようなマンガがなっており、校長先生にそのマンガの「何が好きでないか」「なぜ好きではないか」「どのように問題を修復することができそうか」を説明する手紙を書くという課題である。

このように、オーストラリアのクイーンズランド州では、実社会に応じた様々なリテラシーをマルチリテラシーとしてまるとして評価しようとする取り組みが行われているのである。

## 8. おわりに

本稿では、オーストラリアのクイーンズランド州のリテラシーの評価を描き出し、マルチリテラシーズという読むこと及び書くことに、評価の方法の工夫が必要であることを示した。我が国では、メディア・リテラシーという言い方で、リテラシーの多面的なあり方を授業に取り込もうという動きが増えてきているが、成功をおさめているとは言いがたい。その1つには、このクイーンズランド州の例で見たように、評価の方法にまでは、手が回っていないことに原因がある。

本稿では、グレーディング・マスター、ポートフォリオ、ルーブリック、リテラシーのテストの4つを取り上げてみた。評価が実際の子どもの読み書き活動を支えていることを実感できる事例ばかりである。この中の1つでも我が国の国語科教育に取り入れることで、我が国でも、より多面的な読むことや書くことの指導を展開させることができると考えられる。今後は、さらにどのような仕組みがこのような先進的な実践を支えているのか、検討していきたい。

## 付記

本稿は、平成17年度～18年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究B）「新時代の国語科教育に資するリテラシー概念の再構築」(研究代表者中村敦雄)の補助を受けている。

## 文献

足立幸子 (2005) マルチリテラシーズ 月刊国語教育研究 395 pp.46-51.

足立幸子 (2005) 読書力評価の国際標準にむけての一考察 (3) オーストラリアのDARTの分析 人文科教育研究 32 pp.45-61.

Assessment & New Basics Branch (2004) *The New Basics Research Report*. Brisbane. The State of Queensland.

Cope, B. & Kalantzis, M. (2000) *Multiliteracies: Literacy Learning and the Design of Social Futures*. London. Routledge.

Fehring, H. (Ed.). (2003) *Literacy Assessment: A Collection of Articles from the Australian Literacy Educators' Association*. Newark. International Reading Association.

Fehring, H. (2004) Critical, Analytical and Reflective Literacy Assessment: Reconstructing Practice. Paper provided by 20<sup>th</sup> World Congress. Manila. International Reading Association.

Lokan, J., Greenwood, L., & Cresswell, J. (2001) *15-up and Counting, Reading, Writing, Reasoning: How Literate are Australian Students?: The PISA 2000 Survey of Students' Reading, Mathematical and Scientific Literacy Skills*. Melbourne. Australian Council for Educational Research Ltd.

New London Group (1996) A Pedagogy of Multiliteracies: Designing Social Futures. *Harvard Educational Review* 66(1), pp.90-92.

Queensland Studies Authority (2004) *2004 Queensland Years 3, 5, and 7 Tests in Aspects of Literacy and Numeracy*. Brisbane. The State of Queensland.

Tierney, R. J. & Readence, J. E. (2005) Queensland's New Basics and Rich Literacy Tasks. *Reading Strategies and Practices: a Compendium: Sixth Edition*. Boston. Pearson Education, Inc.

(新潟大学教育人間科学部)